

平成26年7月19日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 孟 憲晨

学位論文題目

島嶼における自然災害と地域社会—奄美大島住用地区の事例を中心に—
(Natural Disasters and Regional Society in Islands—A case of Sumiyō district in Amami Ōshima)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

本研究の目的は、第一に、奄美群島の自然災害の歴史を資料に基づいて記述し、その被害の特徴や災害の変容について考察すること、第二に、2010年の奄美豪雨災害に見舞われた奄美市住用町（旧住用村）を対象に、防災という観点から豪雨災害時と災害後の状況を詳細に記述し、その上で地域社会と防災の問題について、個人、地域活動、自主防災組織、支援者と被支援者等の視点から分析を試みること、第三に、島嶼社会における自然災害と地域社会の問題について、防災の人類学的視点から考察すること、具体的には、過疎高齢化の著しい地域における災害時と災害後の支援者と被支援者の関係を「老老支援」という視点から分析し、「社会的脆弱性」や「災害との共生」といった問題について考察することにある。

2. 本論文の構成

論文全体は、序論と結論のほかに、6章からなる。

第1章「奄美社会と自然災害」では、奄美群島における戦前や戦後、そして近年の台風や豪雨災害の発生状況や被害状況の経過について述べる。そして、19世紀から20世紀初頭までの自然災害の多くが飢饉という間接的被害により多くの犠牲者を出したのに対し、昭和以降、現在までの自然災害は、洪水や土砂災害による直接的被害により、とりわけ高齢者の犠牲者が多く見られるということを確認するとともに、近年、特に突発的豪雨災害が多発するなかで、防災意識が高まってきているという事実を強調する。

第2章「奄美市住用地区における自然災害と防災」では、事例研究として取り上げる奄美市住用地区について、まず、当該地域の概要を述べ、地理的環境や人口構造、住民生活の特徴について紹介する。次に、住用地区の自然災害の歴史を概観し、自然災害に対する地域の取り組みについて振り返る。

第3章「自主防災組織と地域社会」では、住用地区の14集落のうち、2010年の奄美豪

一步踏み込んだ考察を加えることができたことも評価に値する。

3) 本論文は、災害に関する文化人類学の手法と分析方法に基づいた数少ない体系的な研究であり、特に防災の人類学的研究という点では先駆的研究として、一つの研究モデルを提示できた点が評価される。

4. 問題点

1) 本論文の主題が、「島嶼における自然災害」というときの島嶼性とは何であるのか、自然災害における島嶼特有の問題とは何か必ずしも明確に示されていない。

2) 本研究が目指す「防災の人類学的研究」は、先行研究において、災害時や災害後の対応だけでなく日常的な連続性の中で社会関係に注目することであると明確に述べられているが、社会関係の形成過程に関する詳細については、必ずしも十分な記述がなされているとはいえない。

3) 本研究はその主題からして、島嶼学的研究や防災学とのいわば学際的、学融合研究への歩み寄りが求められるが、その点では、防災学や島嶼学に関する体系的・理論的な論究の必要性も課題として指摘された。

5. 総合評価

本論文には、以上のような幾つかの問題点は存在するが、現地での綿密なフィールド調査に基づく緻密な議論を展開していることから、論文としての独創性を備えており、災害の人類学という新しい分野に新たな知見を提示し、その研究の可能性の幅を広げることができた点は高く評価できる。よって、審査員全員が一致して、博士(学術)の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものであると認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合 否

審査委員

主査 (氏名) 桑原季雄

副査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 長嶋俊介

副査 (氏名) 村、勲男

副査 (氏名) 印